

佐多稲子全集

第十六卷／子供の眼

講談社

佐多稲子全集 第十六卷



昭和五十四年三月二十日第一刷発行

著者／佐多稲子

発行者／野間省一

発行所／株式会社講談社 東京都文京区音羽二―一二―二 郵便番号 一一二

電話／東京（〇三）九四五―一一―（大代表） 振替東京八一三九三〇

印刷所／豊国印刷株式会社

製本所／藤沢製本株式会社

定価／二八〇〇円

©佐多稲子 昭和五十四年 落丁本・乱丁本はお取り替えます。 Printed in Japan

目次

I

帝国主義戦争のあと押しをする婦人団体	11
婦人労働者とプチ・ブル婦人	17
いつもと違う	22

II

室生先生のこと	35
プロレタリア文学の世界	38
平林たい子論	40
プロレタリア婦人作家の問題	43
中條百合子の「甘さ」について	47
片岡鉄兵の「転向」について	49
本質の上にかけられた覆い	51
中野重治のこと	55
プロレタリア文学の前進を示した二つの作品	58
ある日の同志小林多喜二	62
覚え書の中から	64
創作方法に関する感想	65
ナルブ解散に対する諸家の感想	67
婦人作家の故に	68
山本有三氏の文章	73
デカダニズムの敗北	79
現実と芸術性	86
村山知義氏「わが白痴」	91

進む一月	23
獄中の同志へ	27
私たち働く婦人と小林多喜二	29

文章雑感 92

我が身ひとつの哀歎 95

季節の記憶 98

チェーホフとモウパッサン

「迷路」と「道づれ」 104

ロマンについて 107

III

我がはしがき 135

割引 146

ちよう法な友達 147

波の起伏 153

地下鉄の幻想 154

夏の夕方の墓 156

仕事のあいまに 160

工場の託児所を訪ねる 165

102

小説の勉強 110

旧友への手紙 114

中本たか子さんを想う

私小説と客観小説 122

地肌と真実 127

文学の鉱石 129

大切なもの 170

桔梗 172

母の随筆 173

正しい成長のために 176

留置所の日 178

子供とベンと 180

ビルディングの雨 183

病中日記 187

119

寒さの連想	189
秋の風景画	191
五日間の日記	195
浜の婦人たち	198
鳥の眼の話	207
戸塚から落合へ	212
戦時体制下の婦人の働きかけ	216
折に触れた音	219
「綴方教室」の小学校	224
文学的自叙伝	232
子供の驚き	241
感傷と記憶	244
隣り近所	247
私の頁	250
朝鮮の子供たちその他	254
隠された頁	259

金剛山にて	292
早稲田と叔父の思い出	295
「わが小説論」という課題	298
若い日の経験	300
春の挿話	305
随筆三題	310
冬の随筆	315
甲州の秋	318
借金を感じ	322
涼しそうな女	325
数々の挿話	327
事件・空想・文化	331
朝鮮印象記	336
生活断片	340
朝鮮でのあれこれ	341
奉天所感	346

大連の印象 349
最前線の人々 353

IV

女給の生活 379

女性読本 387

怖ろしき矛盾 397

生むは愉し育てるは難し

人の美しさについて 410

二度目の妻 415

407

作戦地区の空 365
空を征く心 370

南の女の表情 425

あとがき・時と人と私のこと (15)

注解 442

初出誌紙・発表年月 446

433

佐多稲子全集

第十六卷

I

帝国主義戦争の

あと押しをする婦人団体

日本の生命線だと騒いだ満州、上海の戦争のその後について、私たちは今どういうことを知っているのだろうか？

先ず第一に、もう戦争はお終いになった、停戦になったと新聞は書いた。凱旋兵出迎えのバンザイの声は、私たちの耳に目に伝えられた。そして輝やかしき新満州国は生まれた、と言ってあらゆるものを通じて宣伝された。あなた方が道を歩いていると、商店の飾窓には満蒙の写真が貼ってありラジオの講演のドラ声が往来に流れていたでしょう。新満州国は映画にもなった。雑誌の口絵にもなった。そして遂には、ソヴェートの幸福な生活に希望を持ち始めた勤労大衆をごまかすために、「ソヴェートの五カ年計画」と「新満州

国」とこの映画を同時に並べて日比谷公会堂で公開した。さも、この二つの全く違った国を、同じものだと思わせるために恥ずかしげもなく並べたのです。

戦争を始める時に、満州さえとれば、日本の勤労大衆の生活も楽になると宣伝されたが、望みどおりに新満州国が生まれた今、果して勤労大衆の生活が楽になっただろうか。生命線の満州はとったが、私たちの生活はよくなるどころか物価は上りっ放し、失業は増えるばかりです。労働はますます辛くなり、農村は全く飢えに突き落されている。では、日本の資本家とこの満州国は？ 私たちはこれをはっきりと見よう。

日本ブルジョアジーは満蒙に向って、今どんどん投資している。つまりそこで商売を始めるわけです。奉天その他に大工業都市が建設中です。三井は、ねかしてあった資本、二千万を、高い利子で満州国に貸しつけた。このような利益に、日本の資本家だけでなく、外国のブルジョアも分け前にあずかっている。そしてその満州には日本と同じように失業者がいっぱいとのこと。日本の生命線だと言って、勤労大衆にとってはいちばんの働き手を満州に引っぱり出した今度の戦争が（多数の戦死者を出した）全くブルジョアのためで

あったことがはっきりと分るではありませんか。

社会民衆党の別働隊、杜民婦人同盟は、その機関紙「民衆婦人」(十二月二十五日発行)で次のように言いました。「無産階級のみが多額の犠牲を払って確保した満蒙の利益は、当然無産階級のみに与えらるべきである」これは勿論社民党の言い種でもあった。こうして赤松明子等の杜民婦人同盟はブルジョアの戦争に對して、勤労大衆の立場にいるような風をよそおって、戦争のあと押しをした。満州をとるためには勤労大衆が働くのだから、分け前をよこせ、そう言うことによつて戦争を続けさせ、戦争をやつてさえしまえばあとはどうにでもなる!と。全く労働者農民大衆を餌にかけたのです。これが社会ファシストである。社会ファシストがこのように勤労者の立場をよそおって、ブルジョアのお役に立っている時愛国婦人会を始め、全てのブルジョア反動婦人団体、宗教婦人団体、無産婦人団体が、また婦人の立場をもつてこの帝国主義戦争に力添えをしました。今日私たち働く婦人が、その「女」という封建的隷属と、勤労婦人としての資本主義的圧迫の下で一番苦しい生活を強いられている時、この女という立場を利用して、併せてそうすることに

よつていつまでも現在の状態に婦人をつなぎとめておこうとするこれらの反動的ファシスト的婦人団体の役割を、私たちははっきりと見破らねばならぬ。

最近、満州国からは承認問題でいろいろの使節が日本にやつてくる。この満州国承認ということは、日本の資本家が自由に出来るように、そこだけを中国の中から別にしてしまうということです。しかし外国の資本家も、自分たちのためにならなければ、なかなか首をたてにふらない。それで即時承認々々と日本の資本家は騒ぎ乍ら、どうしたらうまい工合に、この満州国を完全に日本のものに出来るか、と機会をねらっているのです。

この承認問題でも二名の婦人使節がやつて来た。新聞雑誌はその写真を掲げて、か弱い女性が、国を思うばかりにはるばるやつて来た。早く承認しなければならぬ、と宣伝している。ここでも婦人使節の「か弱い女性」ということが大變効果的に利用されている。子供の使節もやつて来た。

これを見て、先ず思い出すのは、こん度の戦争で各婦人団体が、やはりこの優しい女心を役立てたことだ。満蒙の戦地へ慰問に行った婦人団体の活動は無い

分多かった。

昨年十月二十八日には、東京目黒の日の出高等女学校の女生徒が二名「やさしい乙女心で、満州の野に帝国の生命線（ブルジョアの生命線である）を守護して毒刃に傷き、病魔に冒されてベッドに臥す我傷病兵士と、出征兵士を慰めんがため」、大連、奉天、長春、寛城子、南嶺の各地にある野営病舎をまわった。

十一月十日には、全日本女子青年団から七名の代表が、満州へ慰問使としてやられた。「女性慰問使が勇ましや満州へ」「貴い生命を賭して活動を続けている満州駐屯軍を慰問のため」「十七、八歳から二十二、三歳までの未婚の処女」を選抜した。ブルジョア新聞はこの時の出発に、「ウラ若い女性三百名が手に手に国旗をかかげ、——駅頭は美わしくも華やかな情景を見せ、代表各嬢は各方面から送られた花束を抱え女子青年団にふさわしく、虔ましく」出立した、と、女の優しさを百パーセントに戦争のために宣伝している。

理事長の山脇房子、理事の吉岡弥生などのブルジョア婦人教育家がその代表女子青年団員を激励し、「全日本の女性の言葉」として（厚かましくも）理事長山脇房子女史の書いた日刊機関紙（慰問号）一千枚を持た

せてやった。

北海道の旭川高等女学校の「可憐な生徒五名は」先生に率いられて満州へ行き、各地の兵士を慰問し、衛戍病院では「可憐な舞踊で慰めた」。長野県女子青年団では、「出征兵士に対して精神的慰問を行うべく」出発港まで見送りに行った。（これに対しては上田女子青年団だけは、この企てがお祭り騒ぎで、無駄だと言うことによつて参加を拒んでいる）大阪でも処女会、婦人会がやはり慰問隊に加った。

このような「か弱い乙女」の慰問は、どんな役割を果すだろう。戦地における兵士たちはそれこそブルジョア側でも言うように、生命を的にしている生活の中で、遠く故郷の稲の収穫のよし悪しや、老いた父母と幼い弟妹ばかりの暗いいろりの端を思い、または飢えになく子供を抱えた女房一人の、借金に苦しむ、米の買えぬ、るす中の家 pensando、自分の今やっている戦争に対して何かを考えようとし始める。これは決して嘘ではない。東北のある農村に起つた次の話も、一つだけの特別なものではないのです。それは或る家に、戦地の息子から手紙が来た時でした。手紙の目方が重く、三銭では足りないので、六銭の不足税を払わねば

ならなかった。ところがその家では一銭の金もない。

懐かしい息子の手紙、飛び立つほど見たい戦地の息子の手紙、それを前にして、六銭の金のために受取ることが出来ない。手紙は戦地の息子へ送り返された。息子はそれを見て泣いたという事実です。これは「東洋経済時報」が何かに出ていた話です。これを聞いて私たち勤労婦人はブルジョアジーに対する怒りに血がわき立つ思いです。兵士はきつと戦争は何のためかと思うに違いない。その時に、この「優しい乙女」の慰問は何を持ってゆくだろう。優しい乙女は今行われている帝国主義戦争の正体の上に薄絹ベリルをかけて分らなくし、戦地と、故郷の間を遠ざける。そして、ブルジョア戦争に、一生懸命働くようからめ手からの煽動の火の手を燃やさせるに役立つのである。優しい乙女心はなかなか有意義に役立つのです。帝国主義戦争には必要な、欠くべからざるものなのです。

ブルジョアジーがこんな風に女を利用するのに、片方では一家の働き手をうばい、後のフタンを一切女に押しつけています。しかも、それは一家の働き手ということだけでなしに、工場でも、男の代りを女に押しつけますます労働強化するのです。そのくせ、やさし

い女心というものを女に押しつけ、そして戦争に行った兵士を眠らせ、女自身も眠らせるのです。

併し、勤労婦人は、ブルジョアジーがいかにやさしい女らしさを強制的に吹きこもうとしても、資本家地主階級にむかって、たたかう時には非常に強くなるものである。

それは、ソヴェート同盟がもとのロシアで皇帝がいて非常にくるしい生活を強いられていた時、戦争が起った。その時婦人はどうしたか？ 婦人が、真先に、パンをよこせ、幸福をよこせ、といって立ち上った。それが今の幸福な労働者農民の国ソヴェートを作る革命の口火を切ったのです。

日本でも、大戦直後の米騒動を皆さんは覚えていてでしょう。あれも富山の漁村のかみさん連中が真先に立ち上った。それが全国にひろがったのです。

これを見ても分るように、私たちが資本家地主のいうやさしさにだまされることなく、戦争に対してもっているほんとうの勤労婦人の気持、あくまで戦争には反対だという気持をはっきりさせましょう。

愛国婦人会などは、十年近く殆んど無活動であったのに、この戦争と同時に活動し始めました。「陸軍省